

小学3・4年生部門

みなさん大変よく準備していらっしやっただと思います。良い音楽性を感じられる方も多くいらっしやいました。生徒さんと先生方の努力の結晶がこのような素晴らしい演奏に繋がったと思います。お疲れ様でした！

みなさん、特に今回全国大会を通過しなかった方へのメッセージとして、コンクールに勝つことはそれ自体が目的になってはいけないということをお伝えしたいと思います。コンクールに参加することは、例えば自分の技術を確認したり、モチベーションを高めたり、異なったアプローチや意見を学んだり、自分の性格を見直したりするための方法でしかありません。本当の目的は常に音楽、芸術、そして自分自身の成長でなければなりません。様々な経験を通して、喜びや楽しみだけでなくさらに深い感情を知ること、より音楽への理解が深まるのです。どの参加者の方も、それぞれ個性や強み、課題が異なるため、全員に共通するアドバイスを書くというのは大変難しいのですが、特に下記のことについてお伝えしたいと思います。

- ・音楽を横に流れていく線のように捉えること、歌うように演奏すること、フレーズが流れるように、曲全体を通して物語を語るようなイメージで。つまり、適度な距離感と全体的な見通しをもって、長いフレーズを作らなければなりません。
- ・ペダルは、濁らないようにするだけでなく、賢く踏まなければなりません。できるだけ和声やバスの音を維持するように。踏みかえる場合には、構成がはっきりと分かるように。つまり、多くの場合、少し後に踏みかえて、音や声部などのバランスに気を付けるように。
- ・指先をしっかりと動かすこと。特に和音を弾くときには、全ての音をしっかりと「掴んで」ください。どんな音を出しているかよく気を付けて、良い音の質で弾けるように。
- ・シンプルに、自然に演奏すること。そのほうがうまくいくことが多いでしょう。
- ・フレーズとフレーズの間に自然な呼吸を感じて。
- ・特に、背中、肩、腕、そして時々肘や前腕など、体が緊張しすぎてしまわないように気を付けましょう。

- ・拍子感を大切にしましょう。
- ・感じたまま、思いきり表現をしたのち、それが自然であるかを確認してみましょう。
- ・（成長期ですので）絶えず椅子の高さ、ピアノからの距離を確認しましょう。
- ・良い姿勢を意識し、身体や腕を動かし過ぎないように心がけましょう。
- ・響きを良く聴きましょう。
- ・呼吸を大切に、フレーズのまとまりを考え、感じて演奏しましょう。
- ・和音の変化を味わい表現に活かしましょう。

- ・課題曲となった楽曲は全て、表現の繊細さや洒落感を要するものでした。小学3・4年生というご年齢で、アゴギクを感じながら、塩梅良く豊かな表現を実現するのは至難の業であると思いますが、構築を意識しデリケートに表現されていらっしやる方が多く感心いたしました。と同時に、熱意ある先生方のご指導の賜物であると、指導者の一人として刺激を受けました。
- ・ペダルの響きに頼りすぎてしまい、指（テクニック）による legato が意識されていない方が多くみられました。指での legato に注意されると、より豊かな表現につながると思います。
- ・ニュアンスのある音楽の流れを感覚的につかむことに長けていらっしやる方が目立ちましたが、反面、読譜のミスや、和音であるはずが単音になってしまっているなどの粗さも目立ちました。作曲家からのメッセージである楽譜を丁寧に、愛情をもって読みこんでいかれると良いと思いました。

完成度が高く、表情豊かに表現できている人が多いことに感心しました。フレーズの終わりで、過度な rit.にならないよう、自然な流れを心がけましょう。音価分の長さをペダルで頼るのではなく、指で保つようにしましょう。Pのアクセントとfのアクセントの違いを考えてみましょう。自分の音を良く聴いて練習しましょう。

ホールの大きさ、メーカーの違うピアノ、自宅用ピアノなど、同じ曲でもずいぶん響きに大差があり、審査が難しかったです。小さなお子さんも、難しい曲を皆さん達者に演奏されていて、感動する演奏もたくさんありました。アシストペダルを上手に使って、ペダリングが皆さんうまかったです。

各曲の持つテンポ感をととても相応しいイメージで捕えられている人とそうでない人がいました。皆さんそれぞれに表現を工夫されて弾いていらっしゃいましたが、誇張しすぎたり不自然にならないように、全体の流れて感じて客観的に聞く耳を養っていかれると良いと思います。

参加者皆様の水準の高い演奏に接し、感動致しました。まだ中学年でありながら作品の理解を深め、共感し、表現力の巧みな参加者から、テクニックは充分でありながら音楽的理解を得られないまま演奏される方まで、作品の魅力を引き出す点において、個々の差を感じました。当コンクールは、どなたでも、一流の教授陣によるハイレベルな指導を受けるチャンスがあり、この機会を最大限に活かせば、受賞如何にかかわらず、課題を克服し、作品の背景や理解を深める事で、大きく成長できると思います。コロナ渦の中、負けずにご参加いただいた皆様には、深く感謝致しますと共に熱いエールを贈ります。今回入賞に至らなかった方もあきらめずに、さらに勉強を続けて、また再チャレンジしてください。